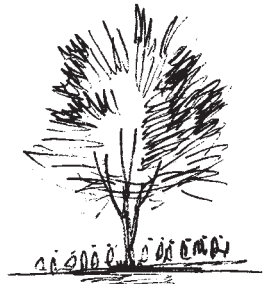


光の子



No.193 2019.12.25

●年間聖句 人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。
(マタイによる福音書7章12節より)



「子どもたちの夢のために」

表紙絵・中島由起子

「冬銀河」

よこはまに異国の船やクリスマス

煙突に風鳴つてゐる冬銀河

絵も添へてサンタクロースへの手紙

聖夜劇聖母マリアに台詞なく

靴の指もて切れる十字かな

パン屑に群るる雀もクリスマス

降誕祭あかときの星残したる

黛 まどか

「クリスマス」

「どんな救い主のお生まれ？」

北本教会牧師（聖学院大学名誉教授） 阿部 洋治

一

クリスマスは言うまでもなく、救い主として来られた主イエスの誕生を祝う時です。けれども、主イエスはどういう救い主として来られたのでしょうか。

ヨハネ福音書によれば、洗礼者ヨハネは、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」（1・29）と人々に紹介した人でした。ところが、ヘロデ王によって牢獄に監禁されたヨハネは、主イエスの働きを耳にして、この人が本当に来るべきキリストなのかと疑いを覚えたのです。

ヨハネ自身は、神の怒りに迫られ、「悔い改めにふさわしい実を結べ」（マタイ3・8）と厳しい預言活動をした人でした。そして、おそらく、ヨハネが期待したこと、人々が神の前に悔い改め、神の御心にふさわしい社

会が形成されることでした。

だから、主イエスにはもつと大胆かつ積極的な活動に立ち上がってほしかつたのです。しかし、ヨハネが伝え聞く限り、主イエスはそういう活動をしていなかったのです。そこで人を遣わして、「来るべき方は、あなたでしようか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか」と尋ねさせたのです（マタイ11・3）。

主イエスは、遣わされて来た人に言いました。「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。わたしにつまずかない人は幸いです」と（同11・4―5）。

これを聞いたヨハネはどう思ったでしょう。主イエスが関わっておられたのは、耳の聞こえない人、足の不自由な人、重い皮膚病の人、耳の聞こえない人、病に伏している人、そして貧しい人のことでありました。もちろん、ヨハネは、こうした人々を助けることを否定はしなかったと思います。けれども、ヨハネ自身がヘロデに面と向かつて罪を指摘し悔い改めを迫ったように、キリストである主イエスには、社会の指導者層に食い込んで行き、社会を変え、る働きを期待したのだと思います。

二

ところで、主イエスは、ヨハネからの遣いの者が帰った後、弟子たちに洗礼者ヨハネの偉大さを強調されました。世捨て人のように荒れ野に生活し、立派な服装で自分を飾り立てることもなく、相手がどんな立場の人であろうと、また人からどんな風に評価されようと、大胆に罪を指摘して、預言者の中の預言者、い

や、「預言者以上の者だ」（同11・9）と語り、さらには、「およそ女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネより偉大な者は現れなかった」（同11・11）と、ヨハネに対する尊敬の念を明らかにされたのです。

しかし、注目すべきことに、この後、主イエスは、弟子たちに次のように語られました。「しかし、天の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である」（同11・11）と。果たして、「小さな者」とはどのような人のことでしょうか。それは、社会的地位の低い人々、人から評価されるような技能も才能のない無力な人々、時には人々の重荷になつてしまうような人々であるかも知れません。しかし、そのように「小さな者」であっても、いや、そのように「小さな者」であるからこそ、そうでなければ体感できなかつた主イエスの恵みと力を味わい知ることができるので、だから、彼は、何もできなくても、主イエスの恵みと力を人々と分かち合うことができるのです。

この「小さな者」の働きは目立ちません。でも塩がそうであるように、その存在が知られないほどに極めてわずかであっても、人と人の交わりを心の通う味わいのあるものに変えて行くのです。また、暗がりにおける光がそうであるように、人が幸せになれる道がどこにあるかを照らし出すことができるのです。だから、主イエスは、弟子たちに言われたのです。「あなたがたは地の塩である」(マタイ5・13)と。そして、また、「あなたがたは世の光である」(同5・14)と。

三

神の国は社会の変革によるものではありません。神の恵みと力を味わった人々が、その恵みと力を身近な人々と分かち合う交わりの中に到来するのです。そのため働き人は、主イエスがそうであったように、「叫ばず、呼ばわらず、声を巷に響かせない」(イザヤ42・2)。「傷ついた葦を折ることなく、ほの暗い灯心を消すことなく、真実をもって道をしめす」(同42・

92才の恩師が「全国がん教育勉強会」を始めた

老健施設みゆきの丘 施設長 仙道 富士郎



恩師、小林博士先生のことについて語りたい。

内科の大学院に入学した私だったが、1年間、基礎医学を勉強すべく、「癌免疫研究施設」の教授に就任したばかりの小林先生の教室の門を叩いた。しかし、小林先生に命じられて実験した「癌の異物化」は、医学生時代受け学生だった私の心を揺さぶり、気が付くと、私は基礎医学者の道を歩いていた。

小林先生が普通の学者とは違うと気が付いたのは、北大の小林先生のところから、山形大学に移ってからだったと思う。「癌免疫研究施設」の

名前が示す如く、小林先生はがんの免疫を専門としていたが、ある時、先生は、がんの免疫学的研究から手を引く方向に向かつていった。《癌の異物化》は、これまでに見られたことがないくらい強いがんに対する免疫だったが、それでもネズミの癌さえも直すことが出来なかった。がんの免疫ではヒトのがんは救えないと思つた。《小林先生の述懐である。》

でも、学者は、営々と築いてきた自分の学問の道を捨てきれないのが常ではないだろうか。なぜなら、新しい道を見出すには、とてつもない難儀を伴うし、難儀したからといって、新しい道など見つからないかもしれないのである。「まあ仕方あるまい」そう言つて、同じ道の小路に入つていくのである。

だが、小林先生は違つていた。《がんから人を救うには「がんの予防」が大事である》という大局的な考えに到達し、それまで手掛けたことのない「がんの予防」の道に入つていった。そして、色々な取り組みを試みた後、ご縁から、スリランカの嘔みたばこによる口腔がんの発生を予防する取り組みを始めた。しかし、スリランカの人々の日常生活と深く結びついている嘔みたばこの習慣を変えることは、いかなる小林先生とさえもなかなか困難であった。

ところがである。ご著書『子どもががん予防』*の中に書いてあるのだが、《「大人」がダメなら急がば回れ、今度は「子ども」を説得して

みてはどうかとのアイデアがふと浮かんだのである。——その子どもたちが大きくなつたときはいまの大人の悪い習慣に染まることなく健康的な生活を送ってくれるに違いない。——》ということ、小林先生は、スリランカの子どもたちのがん予防教育を始めたのである。

私はこの話を聞いて絶句してしまった。失礼ながら、結構なお歳の小林先生が、スリランカの子どもたちが大人になつた時、この世にはいらつしやるとは思えない。そのような未来の事を想定して、今新しい試みを始めようとしているのである。この時私は、「がんは小林先生にとつて研究対象などという小さなものではなくて、小林先生が生きていること、そのものなのだ」と思った。

そして、がんの学習をしたスリランカの子どもたちが、親たち、さらにコミュニティの大人たちに、がんの予防に生活習慣が大切であることについて語るところまで広がっていった。新しい学びの場の始まりである。そこで止まら

ないのが先生である。スリランカの経験をもとにして、今度は我が国の子どものがん教育に本格的に取り組み始めたのである。その一つの結実がタイトルに書いた「全国がん教育勉強会」なのである。勉強会といえ、10人くらいの人数が普通であるが、なんと170人の人たちがそこには集まっていた。学校の先生たちはもちろんのこと、医師、看護師、大学の先生、がん研究者、行政に関わっている人たち等々、まさに多種職の人たちが「がん教育」の一点に凝集した議論を繰り広げていた。

私はといえば、92歳にして「子どものがん教育」に全力を注ぐ恩師に敬意を表すために会に出席した、たった1人の部外者だったかもしれない。午後からの参加者全員参加のワークショップで「あなたはこのからがん教育のために何をするか」と司会者に問い詰められ、「ある機関誌に連載しているエッセイに今日の勉強会の事を書く」と言った。その結果がこの原稿である。

*小林 博著『子どもの力で「がん予防」——親を変え、地域を変えた日本人医師のスリランカでの健康増進活動——』小学館新書、2011年

共育ちカンガル―日記 (54)

鼓笛行進

近藤 みちる



優希の学校の運動会では、6年生による鼓笛行進が毎年恒例の花形種目となつていて、これはパパが小学生だった頃から続く伝統なのだそう

だ。鼓笛隊の構成は、指揮者、フラッグ、大太鼓、小太鼓、シンバル、ベルリラ、アコーデオオン、鍵盤ハーモニカ、リコーダーなどから成り、30数年前に6年生だったパパは、難関オーデイションを突破して小太鼓の座を手にしたそう。そんなパパの話聞いて、優希は鼓笛行進の舞台に立つことを心待ちにするようになった。自分もパパ

のように小太鼓を叩いてみたい、そんな夢も口にしてきた。

そして今年優希は6年生になり、憧れの舞台を目の前にした。だが一つ大きな心懸かりがあった。鼓笛の楽器決めには厳格なルールがある。どの楽器もオーデイションがあり、オーデイションを受けるためには、まずリコーダーのテストに合格することが前提条件とされている。テストの課題曲はその年の鼓笛行進で演奏する曲と決まっています、メドレーなので曲数は数曲にのぼる。1学期の終わりに楽

譜が配られ、2学期早々にテストが行われるため、6年生の夏休みはどの子もリコーダーの練習に明け暮れることになる。

心懸かりというのは、このリコーダーのテストのことだった。親が言うのもなんだが、優希のリコーダーの腕前は、実はなかなかのもの。だが、音楽の授業や音楽集会など、その腕前を披露する場はあっても、優希が人前でリコーダーを吹くことはこれまで一度もなかった。これには優希なりの理由があつて、リコーダーはピアノや打楽器などと違い、うっかり音を外すと突拍子もない音色が出てしまうため、それが怖くてどうしても人前で吹けない、というのである。

こうした極端なまでの完璧主義は、自閉症ゆえの特性に他ならず、言い換えれば優希の抱える「生きづらさ」の一つでもある。

だが思い返せば、これまでの運動会では、ダンスや組体操など苦手そうに思える種目でも、みんなと一緒に立派にやり遂げてきた優希である。

今年は最後の運動会で、しかも憧れの鼓笛行進ということも、優希の意気込みは並々ならぬものがあつた。

夏休みに入ると優希は誰に言われるでもなく、毎日黙々とリコーダーの練習に励み出した。どの曲も高音域が多く、リコーダーでは音を外しやすい曲ばかりだったが、それでも夏休み後半には、全ての曲を暗譜も含めて完全にマスターした。これには私達も驚いた。

ここまで来ると、残るはリコーダーのテストをどうするかという問題だけである。恐らくは葛藤を抱えつつ、何も言い出せずにいるであろう優希に、私達はこう切り出してみた。2学期の始業式の前日のことだった。

「よく頑張ったね。こんなに上手に吹けるなら、テストは必ず合格すると思うよ。問題はみんなと一緒にテストを受けられるかだよ。みんなの前で吹く勇氣はある？」
「優希ね、本当はずっと、どうしようかなって悩んでたんだ。勇氣はないよ。どうしていいかわからなかった。今、

お母さんがはつきり言ってくれて、ほっとしたよ。」

その言葉に、私達は優希が今ここで乗り越えようとしていくものが何なのかを、ようやく理解できた気がした。それはすでに親の手の及ばないところにあつて、今や優希の周りにはたくさんの理解者や支援者がいるのだ。だから親に出来ることは「大丈夫だよ」と励まして、そっと背中を押し出してやることなのだろうと。親の役目は後方支援なのだと。

「それなら、その気持ちを自分の口から、支援級の先生に言ってみたらどうか。きつと先生、どうしたら優希がテストを受けられるか、一緒に考えてくれるはずだよ。」

その後の展開は目を見張るものがあった。優希は先生方と話し合い、テストは優希の特性を配慮した形で、一人別室で受けられることになった。こうして生まれて初めて受けたリコーダーのテストに優希は見事合格し、念願の小太鼓のオーケストラにも挑戦することが出来た。結果は惜しくも落選に終わったが、

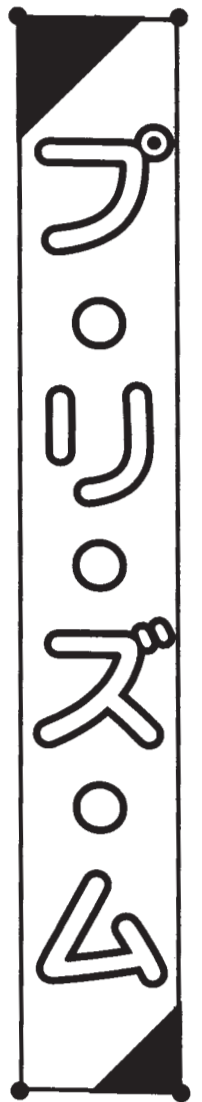
すぐさま欠員の出ていた鍵盤ハーモニカに立候補し、その座を射止めたのだった。

運動会当日は雲一つない秋晴れとなった。指揮者の笛を合図に、6年生120名による堂々たる鼓笛行進が始まった。その中に、ひと際生き生きと楽しそうな優希の姿があつた。

このとき、優希の瞳にはいったいどんな景色が映っていたことだろう。そこに立っていた特別な景色。優希の心には、しっかりと焼きついたはずである。

秋めくや鼓笛行進高らかに
みちる





原田家

岩瀬 志穂

クリスマスおめでとうございます。

今年も子どもたちが待ちに待った、クリスマスがやってきました。子どもたちは何日も前から「サンタさんに〇〇もらおうと！」と言っています。サンタさん効果がすごく効いていて、「すごいね！えらいね！えらい子にはサンタさん来てくれるよ！」と促すと子どもたちは、おりこうさんになって話を聞いてくれます(笑)

光の子どもの家では4週にわたって、各日曜日夕食にアドベントを行い、クリスマスに向けて準備していきます。アドベントでは各ホームが出し物やデザートなど準備をします。

クリスマス会には友人など沢山呼んでパーティーのように盛り上がります。そして、イエス様の誕生を

お祝いします。子どもたちはニコニコですが、大人たちはヘトヘトになったりします(笑)

佐藤家

池田 祐子

クリスマスおめでとうございます。そして、新年明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いいたします。

5月に光の子どもの家へ(一時保護)としてやってきて、7月に正式に(入所)となった小2の達也。その間、何度か児童相談所の担当福祉司は、達也に会いに来て話をきいてくれました。

福祉司は各々たくさんの案件を抱え、また、人事異動もあります。子どもによっては、福祉司について、「しょっちゅう替わるから誰だか判んない。別に話すこともない」と、言う子もいます。で

も、達也にとっては、誰よりも大好きで信頼できる存在でした。「今度いつ来るかな?」「早く会いたい」と福祉司が会いに来てくれるのを心待ちにしています。

一時保護の間は入所に向けて、達也の様子をみたり、意見をきいたりするために、会いに来ていましたが、入所となってからは、あまり来なくなりました。

達也は「(福祉司に)会いたい」と、施設長の元へ言いに行ったそうです。

また、ある日、佐藤家の数人で外食へ出かけた時には、食事中にポロポロと涙を流し、「(福祉司が)会いに来てくれない」と言っていたそうです。

福祉司も多忙なので一時保護中のように会いには来られないとは思いますが、達也は待っていますよお。

仙道家

岩崎 まり子

クリスマス、おめでとうございます。2019年も大変お世話になりました。

先日、他の児童養護施設で3日間、研修させて頂きました。改めて自分の働きを見直し、反省させられました。同時に不思議とエネルギーを補充させて頂いたような思いで帰ってきました。

研修に出かける前、卒園間際の鮎子と

「まりっぺは、もう勉強することなんてないでしょう。私たちが育てたんだから。」
「いやいや、生涯学習ですから。」

と答えつつ、お互い大笑いしました。

どの子も、幼くして大変な境遇を背負ってここへ辿り着いたのです。平穩無事な日常を送れる方が奇跡でしょう。

彼女もかつては些細なことで怒り、暴言暴力的表現は日常、一方で執拗にしがみついて来るのでタイムアウトもで

きず、私は隠れんぼをするように家中逃げ回ったこともありました。

「もう笑うしかないでしょう。」

とおっしゃっていましたが、まさにその通りです。どんな

に「笑ってんじゃねえ！」と言われても、また、その時は笑えなくても後々には「笑うしかない」笑い飛ばしてしまえるエピソードになっていくのです。

時間はある意味プレゼントです。時が解決してくれることは案外多いと思います。

どうぞ、皆様にも豊かな時間が与えられますように。今年もよろしくお願ひします。

倉澤家

佐藤 義岳

10月半ばのこと。高校2年の瑠璃がLINEで「これって当てはまる？」と画像を送ってきた。「資格・検定試験における受験料減免の配慮」と書かれた文書で、何かの冊子の1ページを撮ったものようでした。

帰宅した瑠璃に冊子を見せてもらいました。当時は2020年度の大学入学共通テストから導入されることになっていた、いわゆる「英語民間試験」共通ID発行手続きについての冊子でした。

受験料減免対象者は、①住民税所得割非課税世帯の者、②生活保護（生業扶助）世帯の者、③文科省「高校生等奨学給付金」受給者、のいずれかに該当する者とのこと。さて、児童養護施設に措置されている児童は当てはまるのでしょうか……？

受験や学生生活にどれだけお金がかかるのか。児童養護施設からは18歳（措置延長しても20歳）で退所しなければならぬ。その先、生活的にも経済的にも自立してやっていけるのか。子ども本人も私たちも、不安がいつぱいで

す。文科省のウェブサイトに「高等教育の修学支援新制度に係る質問と回答（Q&A）」が公開されています。これは、2020年度から始まる大学授業料等減免や給付型奨学金に関わるものです。

その中の「資料12」で、満18歳となる前日又は高校卒業時点において、児童養護施設等に入所していた者は、本人の所得・資産のみで減免・給付の可否や金額を判定する旨が書かれています。

「英語民間試験」の受験料減免も、右と同じ条件が適用されることになっていたのでしようか？ もしそうなら、受験料減免対象となる条件の①に該当することになります

が、果たして……。国の制度変更や各種団体の活動により、就学・就労の支援が広がってきたことはとてもありがたいことです。しかし、どんな支援メニューがあるのかが複雑でわかりにくく、高校などで資料が配られても、子ども自身が「自分はこの制度の対象になるのか」を判断しづらい。これでは支援の存在に気づかず、希望する進路を諦めたり、苦労したりするケースもあるのではないのでしょうか。制度はもっとシンプルであってほしいものです。

牧野家

牧野 由紀子

卒園を控える伊織は、進路決定のための施設実習を重ねている。光の子どもの家から旅立つことがだんだんと現実的になり、その不安は家でも学校でも激しく表現されている。卒園や実習の話題になると「その話はしない！」と言ったり、自分や周りに当たり散らしたりする毎日である。十数年前に入所したあの日も不安を体で表現していたなあと思ひ出した。

実習前、「私の夢はいつか伊織が作ったパンやクッキーを買いに行くことだからね」と伝えると、ニヤリと笑って「そうなの？」と言っていた。あと数か月、何とか前向きに、そして少しでも良い時間を積み重ねられるようにと願ひながら、伊織と光の子どもの家で過ごす最後のクリスマスを迎える。



現場から…アフターケア⑤

倉澤 智子

これまでたくさんの卒園生を送り出してきました。

最近はメールやLINEで簡単に連絡が取れるようになります、お互いの近況を知ることができるようになりました。

中には瞳のようにしょっちゅう倉澤家に泊まりに来る卒園生もいます。

しかし、中には顔を合わせず、ゆっくり話ができるのは数年に1〜2回、という卒園生もいます。今回は、そんな卒園生との「細く長い関係」について書いてみます。久しぶりに会うと、必ずあ

の頃はこうだった、ああだったと思ひ出話で盛り上がります。そして、その思ひ出話の中で、卒園生たちにとって、今でも印象に残っているとい

う私の言動は意外にも、本人の私がさほど気にもせず、意識もせずにやっていたことや、気がないひとことであり、まったく記憶にないような些細なことでした。

例えば開設当初に入所し、乳幼児期を光の子どもの家でも過ごし、現在は一児の母になった者からは、牛乳が苦手だった自分にコーヒーやココア

を入れて飲ませてくれたことが本当にうれしかった……と会うたびに言われます。

40歳を過ぎた卒園生からは、彼が高校生だった時に私が作ったのり弁を気に入ってくれたようで、それが当時の彼にとつてどれだけ衝撃的なことであつたかということをくり返し聞かれます。

結婚して3人の娘の母になった者は、自分が3人の娘を育ててみてどれだけ光の子どもの家の職員たちに大切に育ててもらっていたか今ならよくわかると言ってくれます。

アフターケアというと私たちが子どもたちのケアを担っているように見えますが、実は卒園生たちと関わることで私たちの気づけなかつたこと

と、知らなかつたことが見えてきます。私は卒園生たちから、あたり前の生活の積み重ねの大切さ、何気ないひと言の大きさを教えてもらいました。そうした関わりのおかげで、ひとつが卒園生たちと私たちを細く長くつなげてくれているのかもしれない。

ある卒園生から、「倉ちゃん」が退職したら、もうここに

は来ないと思う」と言われました。卒園生との関係は、職員との個人的なつながりの方が大きいかもしれません。

しかし、個人ではケアできないようなケースもたくさんあります。ですから、自分が退職しても、困ったときには光の子どもの家に相談に来れるよう、他職員への連携や引き継ぎは必要だと思つています。それと同時に退職後は、ひとりの人間対人間として、これまでとは違った立場で応援していかれたらと思います。

これからも、卒園生は増えていきます。今以上にアフターケアは私たちにとって重要な働きになってくるのではないのでしょうか。

私は親せきのおせっかいなおばちゃんとして、卒園後の子どもたちを細く長く見守つていけたらと思つています。

外ももったいないこと



子どもたちのかがやきとともに

— 光の子どもの家をお支えください —

吹き荒れた台風など様々な災害に今も大変な思いをしていらっしゃる皆様にごくお見舞い申し上げます。雄大な利根川のほとりに位置する光の子どもの家も避難指示によって子どもたち、職員全員で避難致しましたが、一同無事に帰宅致しました。安全 安心な暮らしができること、そのことが決して当たり前でないことを教えられました。

いつも見守ってくださり励ましをいただいていることをこころより感謝申し上げます。

めっきり冷え込むようになってまいりました。寒い中だからこそ、あたたかさがうれしく、暗い中だからこそ、明るさがこころを温めてくれる季節がやってきました。暗闇の中に光としてこの世においでくださったイエスさまのお誕生日のクリスマスをごくお祝いいたします。

クリスマスは光の子どもの家の創立の基盤で私たちの原点です。イエスさまの誕生を真っ先に伝えられたのは、夜通し羊の番をしていた貧しい疲れた羊飼いたちでした。つらいこともたくさん経験してきた子どもたちにごく真っ先に救い主誕生の喜びが知らされるに違いありません。

今年もここではじめてクリスマスを迎える子どもたちがいます。いつも以上に新規入所依頼が相次いでいます。満杯状態で部屋数のスペースが広げられず、力量も追いつかずお断りせざるをえない状況に対して、心苦しさが続きます。せめてこんな小さな光の子どもの家では出会えたひとりひとりを大切に、子どもたちの笑顔と生きるちからを生き生きと育むことができますように。求められる、必要な働きを続けることができますように。

今年のクリスマスに、ひとりひとりにどんなプレゼント、そしてメッセージが届けられるでしょうか。

創立35年を経過しあちこち修理、修繕箇所も増え続けております。それに対して計画的に取り組まなければ追いつきません。また社会情勢からも安全対策としての防犯についても見直しが必要になりました。ホッとできこころとからだを温められる、安心して暮らせる暮らしの環境を整えることができますよう必要などころに必要なが満たされますようご支援よろしくお祈りいたします。今後も子どもたちの本来の働きを取り戻すための働きを継続できますよう、お祈りください。

皆さまのご健康が守られクリスマスの祝福が豊かにともにありますように。

2019年 冬

社会福祉法人 光の子どもの家 理事長 大高晋一郎
光の子どもの家を支える会 代表 永野 三恵

郵便振替 00130-1-128022

他銀行からのお振込み

銀行名	ゆうちょ銀行	預金種目	当座
金融機関コード	9900	店名	〇一九店(ゼロイチキュー店)
店番	019	口座番号	0128022

お知らせ

年内の「光の子」は今号が最終です。今年もたくさんの方々に
お世話になりました。来年もどうぞよろしくお願いいたします。
次号194号は2020年3月発行予定です。 光の子編集委員会

材料を提供くださった方々のおかげで園庭にクリスマスツリーを
作ることが出来ました。この背景がそれです。白黒での掲載が残念
ですが、ホームページではカラーで掲載するつもりですのでよろし
ければご覧ください。感謝 クリスマスツリー制作担当 黒川

日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 =

2019年9月～11月

【2019年11月末現在】

幼児7名 小学生12名 中学生6名 高校生7名
他1名 計33名

【9月】

- ☆ 3日 カリフォルニア大学研修生の送別会
- ☆ 5日 渡部かずき君祈念礼拝
卒園生、同級生の方も参加
- ☆ 10日 蓮田市民生委員来訪見学
- ☆ 13日 若月健悟牧師（守谷教会）による職員礼拝 感謝
- ☆ 17日 9月生まれの誕生会
- ☆ 23日 浜田さんによるポートレート撮影 感謝
- ☆ 27日 木田浩靖牧師（東埼玉バプテスト教会）による夕礼拝 感謝
- ☆ 28日 光の子どもの家を設計した増田氏、各家の点検に

【10月】

- ☆ 1日 藤岡孝志氏（日本社会事業大学）による施設内職員研修 感謝
- ☆ 11日 木田浩靖牧師による夕礼拝 感謝
- ☆ 13日 台風19号の影響で深夜2時から避難
朝まで騎西フットボールセンターで過ごす
沢山の卒園生から心配の連絡が入る 感謝
- ☆ 16日 調布市民生委員来訪見学
- ☆ 18日 若月健悟牧師による職員礼拝 感謝
- ☆ 21日 ポートレート撮影（9月17日に不在だった者）
- ☆ 22日 光の子どもの家後援会によるうどん玉作り 感謝
- ☆ 23日 赤十字奉仕団による除草作業 感謝
光の子どもの家後援会によるうどん会 感謝
- ☆ 24日 麻布地区民生委員来訪見学

【11月】

- ☆ 4日 第35回感謝の集い 卒園生も来訪
第122回理事会
- ☆ 6日 交換派遣研修で新吉屋がおお里へ
- ☆ 8日 木田浩靖牧師による夕礼拝 感謝
- ☆ 11日 交換派遣研修でおお里より指導員受入
- ☆ 13日 交換派遣研修で岩崎があいの実へ
- ☆ 14日 インフルエンザ予防接種
- ☆ 15日 若月健悟牧師による職員礼拝 感謝
- ☆ 16日 幼児、ご招待で芋掘りへ 感謝
- ☆ 18日 11月生まれの誕生会
長期派遣研修で泗水学園より保育士受入
- ☆ 25日 交換派遣研修であいの実より指導員受入

〈寄贈者各位(敬称略)〉

土沢 相崎伸子 大橋清栄 生沼不二繪
根岸亜麗朱 オクスリー マルキチ物産
根本勝美 阿久津貞夫 櫻井秀夫 菊地友枝
高橋会計事務所 市川美津子 萩原透公
井上高明 一般社団法人徳州会 小池みどり
マルハン古河店 立正佼成会 斉藤直子
島田 檀淵歌世 松村光明 子ども食堂
井出勝美 常松洋介 芹沢美保 片岡由加
竹林勝子 すくすく広場 和田宏之 豊国道江
鈴木史乃 小澤喜代子 他多数の皆様

〈ボランティア各位(敬称略)〉

山田智 山田裕子 岡本有代 向井進 山田義人
久保田修 三井正俊 島崎静子 常松洋介
木田浩靖 橋本従道 他多数の皆様

☆今年も沢山の方々のお世話になりました。
心から感謝申し上げます。 (黒川)